

家蚕と天蚕 1

常世の虫とは何だったのか

鈴木英文

「日本書紀」によると、皇極3年（644年・大化の改新の前年）7月条にある“常世の虫”の話はご存じの方も多いと思われる。「東国の不尽河（富士川）の辺の人、大生部多（おおふべのおお）、村人に虫を常世神として祭ることをすすめる。秦造河勝（はたのみやつこかわかつ）、民の惑わされるをみて、大生部多を打ち懲らす。」とある。またこの虫は橘（ミカンの一種）曼椒（ホソキ、山椒の古い呼び名）に生え、緑色で黒点があり、蚕に似るとあることから、アゲハチョウのことだとされているが、なぜ、当時かなり高齢だったはずの秦氏の長、河勝が軍勢を率いて富士川まで出張ってきたのか、常世の虫は本当にアゲハチョウだったのか？

エリサン（エリ蚕）については以前（家蚕と天蚕2）紹介したように、日本のシンジュサンによく似た家畜化された天蚕で、東南アジアで飼育されていることから、日本全国に生息するシンジュサンを使った養蚕が古代において存在したのではないかと考えた。

①東南アジアで飼育されているエリサンの養蚕が、南方経由で日本に伝わり、日本在来のシンジュサンによる養蚕に発展したのではないかと（大生氏のルーツは南九州）。

②シンジュサンは柑橘類（キハダ、カラズザンショウ）の葉を食べて育ち、幼虫は薄緑色で黒点があり、カイコのように繭を作る（蚕に似る）。

③秦河勝が、わざわざ富士川までやってきたのは、養蚕の利権を一手に握る秦氏にとって新たなシンジュサンによる養蚕が脅威であると考え、それを手に入れる必要があると考えたのではないかと。

秦河勝の動きからもアゲハチョウよりシンジュサンと考えたほうが理解できるのではないだろうか。大生部多が「常世の神を祭らば、貧しき人は富と寿（いのち）とを致す」と言ったのは、養蚕による収入増（富）と蛹を食用とすることにより不足しがちな良質のタンパク質を得られること（長寿）を意味し、あながち嘘ではなかったのだろう。蚕の蛹が食用にされているように、エリサンの蛹もタイなどでは食用（昆虫食）にされている。大生部多はカルト教団の教祖ではなく、新しい産業を興そうとしたのではなかったのか。ではなぜシンジュサンによる養蚕が残らなかったのか。秦河勝は常世の虫の養蚕を自分のものにしたが、シンジュサンの繭から出来る生糸はカイコからの物に比べ、品質的に劣るものしかできなかつたため、せっかく手に入れたものの捨てざるをえなかつたのだろう。

最後に大生部多の根拠地、富士川の辺（ほとり）とはどこか？私は芝川か富士宮のあたりではなかったかと考えている。



上：シンジュサン♂、下：シンジュサン繭



シンジュサン幼虫